大阪天満宮文庫蔵長松本『寛正六年正月十六日何人百韻』訳注（一）

付　同百韻調査記録及び翻刻

伊藤伸江・奥田　勲

大阪天満宮文庫には、寛正六年（一四六五）正月十六日に張行された賦何人百韻の伝本が二本蔵されている。心敬を宗匠に、専順、行助、宗祇という著名な連歌師たちが一堂に会した、充実した華やかな作風の百韻である。金子金治郎氏によって、前年三月に張行されたと推定されている[注1]熊野千句は、前管領細川勝元の被官安富民部丞盛長の興行であり、心敬を宗匠とした、連歌史上きわめて重要な催しであったが、その熊野千句に参加した専順、行助、宗祇が、再び同じ心敬を宗匠としてこの百韻に参加し、句作を競い合っている。また、翌文正元年（一四六六）には、応仁の乱前夜の騒乱の京都を宗祇が離れ、さらに翌応仁元年（一四六七）には心敬も東国にのがれ、都での盛んな連歌張行は戦乱により衰える。それゆえ、この百韻は、応仁の乱によって都の連歌が壊滅的な打撃を受ける直前の状況を把握するに適した催しの一つであった。

加えて、応仁の乱以前に、四人の連歌師が一堂に会した百韻連歌の中では、四人の連歌師がそれぞれ十七句（専順）、十六句（心敬）、十四句（行助）、十一句（宗祇）と数多く出句している（長松本の出句数に従う）百韻で、そのため彼らの連続した出句も多い。それによって、連歌師たちの付合に対する意識がよくうかがえ、宗祇の質問に心敬が答えた『所々返答』第三状の題材にもなった付合も含まれる百韻である。それゆえ、伊藤と奥田は、在京時の心敬の連歌作品

の研究をすすめるにあたり、『寛正六年正月十六日何人百韻』の表現分析が非常に有用であると判断し、この百韻の注釈作業を共同で行ない、発表をなすこととした。従って、この訳注及び翻刻・解説は、科研費基盤研究(C)「心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究」（研究代表者伊藤、研究分担者奥田）の成果である。注釈等の執筆に関しては、伊藤が下原稿を作成し、奥田とのメール会議及び複数回の対面会議で意見交換、討議を行ない、その結果を完成原稿にまとめた。

【注】

1　金子金治郎『心敬の生活と作品』（昭和五七・桜楓社）

寛正六年正月十六日何人百韻訳注（一）

凡例

一、底本は大阪天満宮蔵寛正六年正月十六日賦何人百韻（長松本）である。対校本は、大阪天満宮蔵延宗本と、江藤保定著『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）所収野坂元定本（野坂本）である。なお、野坂本原本の閲覧がむずかしい状況であり、野坂本の校異は厳密にはなし得ず、参考にあげる際にはその旨を含んで挙げている。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は百韻の翻刻に示してあり、適宜参照されたい。原文の表記の誤りと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、

表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、語釈にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献に依る。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては、私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ改めた。

一、各句には、**【式目】【作者】【語釈】【現代語訳】**の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮し**【現代語訳】**の他に**【付合】【一句立】**の項目を設けた。さらに必要な場合には**【校異】【考察】【補説】【他出文献】**の項目も設けた。

※本訳注（一）の引用文献典拠一覧及び参考文献は、同時に刊行される『愛知県立大学 説林』五九号掲載の「大阪天満宮蔵長松本『寛正六年正月十六日何人百韻』訳注（二）」の末尾に掲載する。参照を願うものである。

（初折　表　一）

一　梅送る風は匂ひのあるじかな　　心敬

【校異】心敬ー心教（野坂本）

【式目】春（梅）　吹物（風）「月をあるじ　花をあるじ　已上非人倫也」　梅只一、紅梅一、冬木一、青梅一、紅葉一（植物・一座五句物）　賦物「送り人」（野坂本賦物集）

【作者】心敬。応永十三年（一四〇六）～文明七年（一四七五）。寛正六年（一四六五）には六十歳。宗匠として十六句出詠。

【語釈】●梅送る　梅がその香を送る。「梅が香もさかひはるかに成りやせん覚むる夢路を送る春風」（下葉集（堯恵）・春・二〇・夜梅）。「ふかぬまぞ袖にもとまる梅が枝の匂や風のあと送るらん」（草根集・梅薫風・六一九七・宝徳二年一月晦日詠）。●あるじ　土地や物を持っている人。主因。目を配る人。『拾遺集』の菅原道真歌「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」から、「梅とアラバ、主」（連珠合璧集）と寄合になっており、「梅」と

「あるじ」は関係が深い言葉であるが、ここは、原因といった意味の「あるじ」。

【現代語訳】梅の花が送る馥郁たる香りを身にしめた春風こそは、梅から匂いを持ち去って、匂いを運ぶ主人となっていることよ。

【他出文献】『芝草句内発句』（本能寺本）に入る。

【考察】例えば、「梅が枝の月を匂ひのあるじにてかすむ色とふ花の春風」（草根集・梅風・長禄元年一月二十三日詠（於恩徳院にての歌合）では、梅の枝は、月の光によってさらに匂いたち、馥郁たる香を放っており、その花から霞む月までも訪れて、馥郁たる花の香を持ち運ぶ春風を詠んでいる。「花の春風」は、桜を題材とした歌では、別れて行く、離れて行く花びらを持つ、すなわち花びらを持ち去る春風として使われており、正徹のこの歌では、匂いを持ち去る春風となる。

従来、宿の梅の香りは風を「しるべ」に知るものであり、それによって宿を訪ね、宿のあるじ（人または不在の場合は梅）に会いにいくという発想の歌が多い。「たれかきてあはれとも見むこの宿のあるじに似たる花の老い木を」（公賢集・七四〇）のごとく、咲き誇る梅こそは、宿を輝かせ、訪れたい気持ちにさせる「あるじ」と考えるのである。だが、ここは、梅から宿のあるじを詠みこむのではなく、梅の香りを運ぶ風に「あるじ」を用いたことが珍しい。梅の匂いを身にまとった訪問者である風こそは、梅のイメージをわきたたせる匂いという客を招じ入れた主なのである。心敬は正徹の「梅風」歌のものの見方、捉え方に影響を受けつつ、それをずらしてあらたなシチュエーションを創造した。

発句としては、梅の薫る屋敷に招かれた喜びを込める。梅が送る薫風があたりに満ち、高雅なたたずまいのこの邸に、客として招かれた喜びを述べた。

なお、「梅送る」は以上のように「梅の花の香りを送る」と解したが、このように「梅」だけで梅の花の香りを表すのは他に例を見ないし、「梅」という語が「を」などの助詞を伴っていないので、梅を主語として「梅が送る」と解する余地があることを付記しておく。

（初折　表　二）　梅送る風は匂ひのあるじかな

二　やどりなれくる鶯の声　　実中

【校異】やとりー屋とに（野坂本）

【式目】春（鶯）　鶯（一座一句物）　やどり（宿只一、旅一、やどり此外にあり。鳥のやどり・露のやどりなどの間に又有べし。」（一座二句物（『連歌新式追加並新式今案等』））

【作者】実中。この百韻の主催者。摂津国高槻の臨済宗景瑞庵の住侍。他に一座した百韻に、細川勝元及びこの百韻同様専順、心敬、行助、宗祇らと同座した年時不詳百韻（発句「撫子の花の兄かも梅雨」）がある。この連歌は細川勝元が発句を詠んだ連歌であり、実中は細川家と関係が深かったのであろう。『新撰菟玖波集』に二首入集しているが、いずれも詠み人しらずの扱いである。

【語釈】●やどりなれくる　家にしきりに来る。名詞の「やどり」は、旅先などの一時的な滞在先。野坂本の「宿」ならば、家屋、自宅を示す。「やどり馴る」という形の動詞が使われた例は、遅く「忘れきややどり馴れにし園の梅花も咲きけり谷の鶯」（雪玉集・待鶯・九九）が見える。ここは名詞「やどり」に「なれくる」と動詞を重ねたと考えておく。●なれくる　親しげによってくる。歌では鹿に使うことが多い。「ほかもたづねし梅匂ふかげ／鶯のなれくる朝戸静かにて」（出陣千句第一百韻・二／三）。

【付合】発句の「梅」に「鶯」をつけ、「あるじ」から縁のある言葉として「やどり」を詠みだした。「鶯とアラバ、梅」（連珠合璧集）。

【一句立】家に親しげにやってきて鳴くうぐいすの声がきこえる。

【現代語訳】（前句　梅の花の送る、馥郁たる香りを身にしめた春風こそは、あたかも香りを招じ入れた主人のようになっていることよ。）　その主の家に毎年訪れて馴れ親しんで鳴く鶯の声よ。

【考察】「馴れくる」に関して、和歌の用例を見ると、本来は人里離れた場所に生息し、よってこないはずの鹿や鳥

が、こちらが山里にあることなどで、例外的にそばにくる場合を詠む。「霧深き山のすみかは軒近くなれくる鳥の声ぞ聞こゆる」（林葉集・秋・五四一・閑居霧深）。連歌で、鶯や鳥に用いた「なれくる」が出てくるのは、一般に永正頃以降。実中の句は早い例となる。春の遅い谷から鶯が出てくる点からみて、この頃には只の野鳥ではなく、特別な鳥である鶯に「なれくる」を用いても、不自然でないと判断されたか。

句の仕立ては、平凡で発句の手の込んだ表現を全く受けていない。この連歌の主催者であるから脇で客の発句を受けなければならないのは当然だが、その意味では無難な仕立てというべきか。脇の「宿」は明らかに実中の坊であるが、心敬の発句の力で、その宿は春風そのものに見立てられている。これは脇の作者の予想しなかったところであろう。

（初折　表　三）　やどりなれくる鶯の声

三　春の野を朝な朝なに分け出でて　　行助

【式目】春（春の野）　野与野（可隔五句物）

【作者】行助。応永十二年（一四〇五）～応仁三年（一四六九）。山名氏の家臣であり、出家後は延暦寺東塔の惣持坊に住み、法印権大僧都に至った。連歌七賢の一人。寛正年間に多く心敬と同座している。

【語釈】●朝な朝な　毎朝.「鶯とアラバ、あさな〳〵」（連珠合璧集）。「野辺ちかくいへゐしせれば鶯の鳴くなる声は朝な朝な聞く」（古今集・春上・一六・詠み人しらず）。●分け出でて　鶯が、かきわけるようにして現れ出て。「鶯は雪の古巣を分け出でてかすむ宮この春に鳴くなり」（伏見院御集・鶯・四八）。

【付合】「鶯」に「朝な朝な」を付けた。古今集一六番歌による付合。前句の「やどり」が里を離れた野にあることがわかる。一句としては毎朝毎朝春の野に出て行く、というだけで、目的は語られていない。普通には、春を求めてとなるだろう。

【一句立】春の野を毎朝毎朝分けて出てきて。

【現代語訳】（前句　家に親しげにきて鳴くうぐいすの声がきこえる。）その声は、春になって朝ごとに野を分けて出てきて、私の家の訪れる鶯の声なのだ。

（初折　表　四）春の野を朝な朝なに分け出でて

四　踏む跡しるき雪のむら消え　　元艘

【校異】元艘ー元説（野坂本）

【式目】雪のむら消え（春）　雪三用之、此外春雪一似物の雪別段の事也（一座四句物）

【作者】元艘　未詳。

【語釈】●踏む跡　踏んだ足跡。雪が降り積もれば、足跡は見えなくなる。「道のべや打ちはらふ袖も踏む跡もゆくゆくやがてうづむ雪かな」（雪玉集・三四一〇・行路雪）。●雪のむら消え　雪がまだらに消え残っていること。「うすくこき野辺のみどりの若草に跡までみゆる雪のむら消え」（新古今・春上・七六・宮内卿）。

【付合】「分け出て」を人が足で踏みしめて出るととらえ、雪解けの柔らかい野原のさまを付けた。

【一句立】踏んだ足跡がはっきり残る、雪がまだらに溶けた柔らかい雪解けの原。

【現代語訳】（前句　春の野を毎朝毎朝春を求めて歩み出て行く人、その人の）足跡もくっきりと残る、まだらに雪が消え残っている野の様よ.

（初折　表　五）踏む跡しるき雪のむら消え

五　谷の戸の霞もとぢぬ月の夜に　　専順

【式目】春（霞）　夜分　春月只一、有明一（一座二句物）　月与月（可隔七句物）　霞におぼろ（可嫌打越物）　霞　霧　雲　煙如此聳物（可隔三句物）　谷（山類・体）　戸（居所・体）

【作者】専順。応永十八年（一四一一）～文明八年（一四七六）。六角堂柳本坊の法眼。『新撰菟玖波集』には心敬、宗砌についで百八句入集している。当時の連歌壇の第一人者であり、和歌においては正徹と交流があり、堯孝の教えも受けていた。

【語釈】●谷の戸　谷の出入り口。「谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつに音せで春もすぎぬる」（拾遺集・雑春・一〇六四・藤原道長）。●霞もとぢぬ　雪は消え、霞はまだ立っていない。「春わかみ霞もとぢぬ柴の戸は松のあらしや猶はらふらむ」（雅世集・戸外春風・六）。

【付合】前の句の情景を、雪が溶けはじめた山奥の夜の光景とし、まだ霞の出ていない空の月に照らされて見えるとした。雪が終わり、霞がまだ始まらないその合間に、谷は春に向かい、暖かさを増した空には、月がくっきりと浮かぶのである。春の句が五句続き、ここで春を終えねばならない。句の情景の転換をせまられる場所であり、次の句の作者が付けやすいように、語義豊かな句作をしており、専順の工夫が見られる。

【一句立】谷の出入り口に、まだ霞もたちこめていない月の夜には。

【現代語訳】（前句　踏んだ足跡もはっきりわかる、まだらな雪の消え残りが見えることだよ、）谷の出入り口に、まだ霞もたちこめていない月の夜には。

（初折　表　六）　谷の戸の霞もとぢぬ月の夜に

六　明け行く方をかよふ山人　　幸綱

【式目】雑　人倫（山人）　人倫与人倫（可嫌打越物）

【作者】幸綱　『熊野千句』、『寛正四年三月廿七日何船百韻』作者。細川氏被官か。

【語釈】●明け行く　夜が次第に明けていく。●山人　山に住む人。「山人とアラバ、山にすむ人をいふ」（連珠合璧集）。「朝夕に通ふ山人みちたえて峰のときは木雪おもるなり」（宝治百首・積雪・二一六一・道助）。

【一句立】夜が明けて行く方角を見れば、歩いて行く山の住人がいる。

【現代語訳】（前句　谷の出入り口に、まだ霞もたちこめていない月の夜のうちに）夜が明けて行く、明るくなっている方を見れば、もうそちらへ歩いて行く山の住人がいることよ。

（初折　表　七）明け行く方をかよふ山人

七　木の本に隠るる道は幽にて　大況

【校異】大況ー士阮（野坂本）

【式目】雑　木に草（可隔三句物）　木与木（可隔五句物）

【作者】大況　未詳。野坂本の作者士阮は、寛正五年新黒谷花下の百韻など、寛正年間に心敬らと同座した連歌師。

【語釈】●木の本に　木の根元に。「木のもとにかよひし道は跡もなし花橘の雪の夜の夢」（草根集・夜廬橘・六〇八一・宝徳元年十一月二十九日詠）。「木の本の寺井にたまる落葉哉」（落葉百韻・発句・一条兼良）。●幽にて　見えない程で。「あらましは我だに知らぬ末ながら／道かすかなる山のかくれ家」（紫野千句第七百韻・一五／一六・定阿／有長）。「つまきこるてふ道かすかなり／山がつのほかは見えこぬ花咲きて」（壁草（書陵部本）八九／九〇）。

【付合】明け方でも、木暗いあたりはまだよく見えない。山人の通う山道を、木の下に隠れているあたりは、たどれないほど見えにくい道だとした。山人の気持ちになった付句。

【一句立】木の下に隠れている道はかすかにしか見えないくらいで。

【現代語訳】（前句　夜が明けていく方角を目指して、歩いて行く山人がいる。）木の下に隠れている道は暗くてかすかにしか見えないくらいで。

（初折　表　八）　木の本に隠るる道は幽にて

八　苔むす橋におほふ松が枝　　宗祇

【式目】雑　橋只一　御階一　梯一　名所一　浮橋一（一座五句物）　松与松（七句可隔物）　植物（松が枝）

【作者】宗祇。応永二八年（一四二一）～文亀二年（一五〇二）。年少のうちに上京、相国寺での禅僧生活の後、宝徳二年（一四五〇）、三十歳頃より連歌の道に入った。寛正六年には四五歳。宗砌に師事した後、寛正年間に入ると専順に師事し、専門連歌師として京洛の連歌会に出詠しはじめ、この百韻には専順の弟子の連歌師として出詠している。専順没後には心敬に師事、この百韻での出句に関しても、文明二年に『所々返答』第三状で心敬に指導を受けた。

【語釈】●苔むす橋　苔が生えている古びた橋。「槙の板も苔むすばかり成りにけりいく世へぬらむせたの長橋」（新古今集・雑中・一六五六・大江匡房）。「山人の跡みゆるまで谷川の苔むす橋に花ぞちりしく」（草庵集・橋辺花・一一六二）。●松が枝　松の枝。「たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとぞ思ふ」（万葉集・巻六・一〇四三・大伴家持、続古今集・雑下・一七五四にも採録）。「松が枝をおつるも苔のみだればし風のみわたるそはの谷川」（草根集・谷橋・六六〇七・宝徳二年十月二十六日詠）。

【付合】道がみえにくいとする前句の説明をなした句。道が実は橋の上だったという謎解きの付け方。「松が枝」は前句の「木」の種類を説明し、句境を転じている。雑の三句目であり、次から句境を変えるために素材を多く入れた。

【一句立】苔の生えた古びた橋の上におおうように広がる松の枝。

【現代語訳】（前句　木の下に隠れている道は暗くてかすかにしか見えない。）実はここは苔の生えた古びた橋の上で、橋の上には、おおうように広がりかぶさる松の枝があるのだ。

【考察】『所々返答』第三状に、七・八句と類似の付合についての心敬の注意がある。類句ではあるが、続いて当該百韻の四四、四五の付合についての指摘がなされることからみて、心敬の心覚えによる句の記述であって、実際はこの付合に関しての注意ではないかと考えられる。心敬が挙げるのは「山ふかみ木の下みちはかすかにて／松がえおほふ苔の

ふるはし」という付合であり、宗祇の付句に関して、松が枝や苔を捨て、ただ橋のみで付けることで、山深い木の下路は物寂しく表現できると指導している。次に心敬の自身の句「篠かしげ橋に霜ふる山ぢ哉」を例に、水辺の事物を入れずに寂寞たる山路のさまを詠んだと誇っており、心敬としては「橋」を入れたのみでも、次からの句境の展開も可能とする感情（かんせい）あふれる作句を求めていたのであった。（→四五【考察】）

（初折　裏　一）　苔むす橋におほふ松が枝

九　岸高く涼しき水のふかみどり　宗怡

【式目】夏（涼しき）　水（水辺・用）　岸只一　彼岸一　名所一（一座三句物）　涼に冷（可嫌打越物）

【作者】宗怡。伝未詳。『熊野千句』『北畠家連歌合』などの作者であり、寛正から文明にかけての百韻連歌にその名が見られる連歌師。

【語釈】●岸高く　川岸は高いところにあり。「岸たかく谷の岩ねをくぐる水末は落ちあふ春の川なみ」（基佐集・二八七）。●ふかみどり　濃い緑色。ここは「深し」を掛ける。「深緑色もかはらぬ松が枝は藤こそ春のしるしなりけれ」（続拾遺集・春下・一四一・後嵯峨院）。「水の色も深緑なる松が崎のどけき陰に千世は経ぬべし」（大嘗会悠紀主基和歌・二六五）。「ふかみどり、中比は五月の季なり。今は雑也。」（梵灯庵袖下集）。

【付合】「松が枝」に「ふかみどり」を付けた。高い橋からの眺望。松の緑は「常盤なる色ながら、春は緑の色一入まさり、夏はしげる梢に枝をまじへ、秋は下紅葉ことに見所あり。冬はつゐに紅葉ぬおのがみさほゝあらはす。雪の比にもなりぬれば、又たぐひすくなき木立也。」（連珠合璧集）という。八句目から十句目にかけては、橋の上にさしかかる松の枝の緑が、水に映り、また水そのものの色としても受け取られて行く付合の流れであろう。ただ、苔、松、深緑と同色が輻輳するのはいかがか。「関の梢や見えわたるらん／夏を我色に清水の深緑／さ波ながるゝ夕風ぞ吹」（文安月千句第十百韻・八／九／十・正信／宗砌／直清）。

【一句立】 川岸は高くそそりたち、深い水が涼しげに深緑色をして流れている。

【現代語訳】（前句　苔の生えた古びた橋にはおおうように広がる松の枝がのび）、高い川岸の下には、松が映じた深い水が涼しげに深緑色をして流れている。

（初折　裏　二）　岸高く涼しき水のふかみどり

一〇　夕べの風に舟ぞよりくる　公範

【式目】雑　風（吹物）　舟（水辺・用、新式今案においては水辺体用之外）　夕（一座二句物）夕に春秋の暮（可嫌打越物）

【作者】公範　未詳。

【語釈】●夕べ　「ゆふべとアラバ、舟とむる」（連珠合璧集）。●舟ぞよりくる　舟がよってくる。「見ればこずゑに舟ぞよりくる／五月雨のふる河柳水こえて」（老葉（吉川本）・二八〇／二八一・宗祇）。

【付合】一句としては海の情景とも解せる。付合では山間の渓谷の趣であるが、舟との関わりがよくわからない。

【一句立】　夕暮れ時の風に舟が近づいてくる。

【現代語訳】（前句　岸は高く、水は涼しげな深緑色である。）　夕暮れになって吹く風で、岸に舟が近づいてくる。

（初折　裏　三）　夕べの風に舟ぞよりくる

一一　薄霧ののぼれば旅の袖見えて　心敬

【校異】はーハ（延宗本）

【式目】薄霧（秋）　旅（旅）　薄霧（聳物・可隔三句物）　袖与袖（可隔五句物）

【作者】心敬

【語釈】●薄霧ののぼれば　薄霧がたちのぼると。「立ちのぼる瀬瀬の川霧跡みえて浪にやどれる月のさやけさ」（嘉元百首・霧・一四六・後宇多院）。●旅の袖　旅人の衣服、また、旅人をさす。和歌にはまず見られないが、連歌には詠まれ、特に心敬によく使用される語句。「舟に波ちる住の江の水／旅の袖いかゞしき津の雪の暮」（小鴨千句第五百韻・二八／二九・日晟／心敬）。「秋たち冬にうつるかなしさ／霜ぞ置露に別し旅の袖」（河越千句第六百韻・三二／三三・長敏／心敬）。

【付合】　前句の夕べを秋の夕暮れ時ととり、霧を付けた。「村雨の露もまだひぬ槙の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮」（新古今集・秋下・四九一・寂蓮法師）。船旅の様子とする。

【一句立】　薄霧が立ち上り、下の方から晴れていくと、、そこには旅人の姿が見えてきて。

【現代語訳】（前句　夕暮れ時の風の中、舟が岸に近づいてくる。）川面の薄霧が上流にのぼって、下流の方から晴れていくと、、舟に乗った旅人の姿が見えてきて。

（初折　裏　四）　薄霧ののぼれば旅の袖見えて

一二　ゆく人つづく秋の山陰　行助

【式目】秋の山陰（秋）　人（人倫）　人倫与人倫（可嫌打越物）

【作者】行助

【語釈】●秋の山陰　秋の気配を見せている山の陰のあたり。「朝な朝な木葉うつろひ鳴く鹿のことわりしるき秋の山陰」（拾遺愚草・秋鹿・二三四六）。「くれてさびしき秋の山陰／晴やらぬ雲をはなれよ峰の月」（表佐千句第三百韻・七四／七五・承世／続家）。

【付合】前句で薄霧がのぼっていくのに旅人が続いて行くと付けた。五・六句と、情景が近い。

【一句立】行く人の姿がとぎれず続いて行く、いかにも秋になった山の陰あたり。

【現代語訳】（前句　薄霧が山をのぼっていくと、霧が晴れたあたりに旅人の姿が見えて。）霧に続いて、行く人がのぼって行く、秋の気配のする山の陰あたりの様子よ。

（初折　裏　五）　ゆく人つづく秋の山陰

一三　もる声の鳥羽田にしげき夜半の月　　実中

【校異】しけきーしるき（延宗本）　中ー玄（野坂本）

【式目】月（秋）　夜半（夜分）　月（光物）　月与月（可隔七句物）　田与田（可隔七句物）

【作者】実中

【語釈】●もる　番をする（「守る」）。秋の田を仮庵をつくって見張る。「かりほさす山田の原にもる声のまどほになるは月や見るらん」（朝棟亭歌会・八五・良恵）。「さをしかの秋の草ふし夜かれしてもる声たかき野田の仮庵」（草根集巻五・田辺鹿・三六一五）。「もる声」とはどのような声か、明らかではないが、田の番人が鹿や猪などを追い払う声であり、「田守のもの追ひたる声、いふかひなく情けなげにうち呼ばひたり」（蜻蛉日記）と、都人には無風流で興ざめなものと感じられていた。伝統的な和歌の世界の語句ではない。●鳥羽田　山城国の歌枕。鳥羽あたりの田。「秋の夜は都の南月ぞすむ鳥羽田の面の雲井遥かに」（最勝四天王院和歌・鳥羽山城・二四五・藤原有家）。「雁の行く南の空もなつかしく／鳥羽田の月に落つる秋風」（新撰菟玖波集・秋下・八五三／八五四・藤原政行）。●夜半の月　夜ふけの月。

【付合】前句の山陰から広く鳥羽の田に目をやり、時刻も夜ふけとした。鳥羽田の近景に対し、遠景の山陰には旅人の列が見えるとしたのは、夜半の風景として多少無理があるか。

【一句立】田を守る声が田の面にしきりに聞こえる、そんな鳥羽の田を夜更けの月が照らしている。

【現代語訳】（前句　行く人の姿が続く秋の山の陰のあたり。）田を守る声が、しきりに田面に聞こえて来て、そんな鳥羽の田を夜更けの月が照らしている。

（初折　裏　六）　もる声の鳥羽田にしげき夜半の月

一四　落つるが上の鴈の一つら　　専順

【式目】 鴈（秋）

【作者】 専順

【語釈】 ●落つる　雁自身にも、雁の声にも、また月にも使われる語句。「大江山かたぶく月の影さえて鳥羽田の面に落つる雁金」（仙洞句題五十首・月前聞雁・一七〇・慈円）。「霜冴ゆるかり田の面に月落ちて声すみのぼるかりの一つら」（師兼千首・霜夜残雁・五四五）。●雁の一つら　雁の一列。勅撰集では風雅集に非常に多く詠まれる京極派愛好の句。

【付合】 月が沈みかける夜半に、田の上を雁の一群が飛んでいく景とした。

【一句立】 下りてくる雁のその上には、また雁の一列が飛んでいる。ここは、前句と「月落つる」とつながり、月が傾き落ちて行く上を、雁が飛んでいくという歌一首の形になるという専順の意図がある。なお、宗祇は専順に関して「歌の言葉を以て連歌を付くること、専順などの句に多く候」（長六文）と評しており、専順の句風として和歌を意識している点をあげている。

【現代語訳】（前句　田を見張る声が鳥羽の田にはしきりと聞こえ、夜更けの月が空にかかる。）その夜更けの月が傾き沈んでいく、その上のあたりの空を雁の一列が飛んでいくことよ。

（初折　裏　七）　落つるが上の鴈の一つら

一五　空にふる露は泪の色ならで　　鰍

【校異】 鰍ー説（野坂本）

【式目】 露（秋）　露（降物・可隔三句物）　涙与涙（可隔七句物）　空空だのめなど云ては此外也（一座四句物）

【作者】 元厠

【語釈】 ●空にふる　空より降り落ちてきてむすぶ。「むなし夜をうらむる空にふる露の月の涙となすぞなぐさむ」（草根集・寄月恋・八六三九・享徳三年七月廿三日詠）。●涙　露を雁の涙と見立てることから「涙」と表現した。「なきわたる雁の涙やおちつらむ物思ふ宿の萩の上の露」（古今集・秋上・二二一・よみ人しらず）。●泪の色　紅色。「くれなゐに涙の色もなりにけりかはるは人の心のみかは」（詞花集・恋上・二二〇・源雅光）。

【付合】「鴈」に「泪」を付けた。「鴈トアラバ、涙」（連珠合璧集）。また、「涙トアラバ、露」（連珠合璧集）。

【一句立】 空から降りおりてくる露は泪の色ではなくて。

【現代語訳】（前句　落ちてくるその上には、雁の一列が飛んでいるけれど、）空から降りおりてくる露は泪の色ではなくて。

（初折　裏　八）　空にふる露は泪の色ならで

一六　もの思ふ身のたぐひ知らばや　　幸綱

【式目】 もの思ふ（恋）　身（人倫）　人倫与人倫（可嫌打越物）

【作者】 幸綱

【語釈】 ●たぐひ　同類。仲間。匹敵するものを言う。「消えかへり物思ふ身のたぐひぞとうきてやまよふむら雲の空」（永享百首・恋・七一六・三條公保）。

【付合】「泪」に「もの思ふ」と続け、恋の句境に転換した。

【一句立】 物思いに沈む私と同じ思いの仲間があったら知りたいものだ。

【現代語訳】（前句　空から降りおりてくる露は雁の泪の紅色ではなくて。）恋にこがれて血の涙を流しているのは私だけのようだ。恋の物思いをしているこの身と同じように、つらい物思いをしている仲間を知りたいものだ。

（初折　裏　九）もの思ふ身のたぐひ知らばや

一七　とはれずは誰に恨みを語らまし　　宗怡

【式目】とはれず・恨み（恋）　誰（人倫）　うらみ　うらむ如此云かへて二句、他准之（一座二句物）　人倫与人倫（可嫌打越物）

【作者】宗怡

【語釈】●恨み　身の歎き。訪れてもらえない悲しみをいう。●語らまし　語ろうかしら。「つらしとも今朝はたれにかかたらまし見し夜の夢のうつつならずは」（新続古今集・恋四・後朝恋・一三三二・西園寺実氏）。

【付合】前句の理由を付けた句。

【一句立】もしも訪ねてもらえないならば、いったい誰にこの身の歎きを語ることができるのだろう。

【現代語訳】（前句　この身と同じように、つらい物思いをしている仲間を知りたいものだ。）もしも訪ねてもらえないなら、いったい誰にこの身の歎きを語ろうかなあ。（同じようにつらい思いをしている仲間にわかってもらうしかないだろう。）

（初折　裏　一〇）とはれずは誰に恨みを語らまし

一八　しのぶにも名はもるる世の中　　大況

【校異】況ー阮（野坂本）

【式目】しのぶ（恋）　世只一　浮世〻中の間に一恋世一　前世後世などに一（一座五句物）

【作者】大況

【語釈】●しのぶ　感情を押し殺して面に出さないこと。●名　噂。評判。●世の中　二人の間柄。

【付合】前句のつぶやきを説明する。

【一句立】密かにあの人を思っているのに、あの人に私が恋をしているという評判が立ってしまう私たちの仲であることよ。

【現代語訳】（前句　訪ねてもらえないなら、誰に恨めしさを語ろうかしら。）誰にも語らず、こっそりとあの人を思っているのに、恋をしているというわさが洩れて評判が立つあの人との仲よ。

（初折　裏　一一）しのぶにも名はもるる世の中

一九　住まばただ心の奥の山もがな　　宗祇

【式目】雑　山（山類・体）

【作者】宗祇

【語釈】●住まば　「世」に続けた表現。現世に住んでいるならば。前句と続けた際には、隠していても、恋をしているという噂がもれる世の中。●心の奥の山　心の奥深くに抱く、俗世を離れ住まう山。「花ならでただ柴の戸をさして思ふ心の奥もみよしのの山」（新古今集・雑中・一六一八・慈円）、「世をそむく山はよし野とききながら心の奥にいつしるべせん」（新後拾遺集・雑上・一三二三・津守量夏）など、心中に吉野のような深山に住む境地を持ちたいという意識が詠まれる。さらにまた、前句の「しのぶ」を陸奥国の歌枕「信夫山」に取れば、「恋ひわびぬ心の奥の忍山露も時雨も色にみせじと」（拾遺愚草・忍恋・二六〇）のように、思いをひた隠すための山となる。「心の奥の山」を忍山とした用例に「白川やしらぬ関路をけふは見て／こゝろのおくの山ぞかなしき」（河越千句第四百韻・四五／四六・心敬／永祥）。

【付合】「しのぶ」から「心の奥」を連想して付けた。「しのぶ山忍びて通ふ道もがな人の心の奥も見るべく」（伊勢物語十五段）。「世」に「住まば」と続ける。前句と続けては、恋の思いをそぶりに出さないように忍山が欲しいとの意になり、一句では、俗世を離れた境地を望む意となる。「とはれねば世のうき事も聞こえこずいとふかひある山の奥かな」

（新後撰集・雑中・一三七一・前僧正実伊）。

【一句立】俗世に住んでいるならば、ただ心の奥に俗世を離れた山里を持ちたいものだ。

【現代語訳】（前句　こっそりとあの人を思っているのに、恋をしているというううわさが洩れて評判が立つ世の中よ。）そんな世の中に住んでいるなら、ただ、恋をしているそぶりが洩れないように、露にも時雨にも色の変らない忍山が心の奥に欲しいものよ。

（初折　裏　一二）　住まばただ心の奥の山もがな

二〇　草の戸荒らす野辺の松風　　心敬

【式目】雑　松風（一座二句物）　戸（居所・体）　初折表、第五句に「谷の戸」がある。『連歌新式追加並新式今案等』では「戸」は一座四句物となり、「樞・関戸・谷戸などの間に折をかゆべし」とされるが、ここではまだ同じ折に存する。

【作者】心敬

【語釈】●草の戸　草で作った粗末な草庵の戸。「明る朝の野辺の露けさ／草の戸は立出るさへ袖濡れて」（竹林抄・雑上・一二六一・行助）。●荒らす　そこなう。いたませる。「うかれきて峯にぞあかす松風も人なき月の宿をあらすな」（草根集・山家月・一七九七・永享四年八月十五日詠）。●野辺の松風　野辺の松を吹く風。「野辺」には「松」「松虫」を続ける場合が多く、「野辺の松風」は和歌の用例が非常に少ない。連歌にも例がわずかであり、「野辺」＋「松風」は、特に積極的に組み合わされた用語ではなく、心敬のたまたま用いた造語と言ってもよいか。「桜狩かりねの夢もみし花もまぎれて明くる野辺の松風」（心敬集・春夢・三四〇）

【付合】「山」に「松風」を付けた。野原のあたりにある粗末な庵で、吹いてくる松風に、山奥を思い、静かな隠遁を夢見る。「松風トアラバ、山」（連珠合璧集）。

【一句立】粗末な草庵の戸をいたませる、野辺を吹く松風。

【現代語訳】（前句　俗世に住んでいるならば、ただ心の奥に俗世を離れた山里を持ちたいものだ。）粗末な草庵の戸をいためつけて悪くする、野辺を吹く松風。

【備考】二〇・二一の付合は、『行助句集』（書陵部本）（一六二九・一六三〇）に入る。

（初折　裏　一三）　草の戸荒らす野辺の松風

二一　古郷は見る人なしに花散りて　　行助

【校異】とーに（野坂本）野坂本により訂正。（参考『行助句集』（書陵部本）（一六三〇）には「見る人なしと」とある。）

【式目】花（春）　古郷（懐旧）　古郷只一名所引合一（一座二句物）　人（人倫）　人倫与人倫（可嫌打越物）

【作者】行助

【語釈】●古郷　古い都。昔なじみの場所。前句の「松」に「待つ」を掛け、縁づける。●見る人なしに　見る人がいないままに。「山桜春のかたみにたづぬれば見る人なしに花ぞ散りける」（新勅撰集・春下・一一七・権大納言公実）

【付合】前句の「荒らす」から、故郷を連想して付けた。古郷トアラバ、庭あれて　軒あれてなど付べし。」（連珠合璧集）

【一句立】故郷では、咲いても見る人もいないままに花が散っていき。

【現代語訳】（前句　粗末な草庵の戸をいためつけて悪くする、野辺を吹く松風。）かつて訪れてくれたあの人を待つ、松風吹く故郷。その故郷であの人を待っていても、あの人は来ず、見てくれる人もいないままに桜の花は散っていってしまう。

（初折　裏　一四）古郷は見る人なしに花散りて

二二　残る日早く暮るる春雨　　専順

【式目】春雨（春）　春雨（一座一句物（新式今案））　日（光物・可隔三句物）　日与日（可隔五句物）

【作者】専順

【語釈】●残る日　暮れ残っている日の光。「残る日を尾上にかけて山本の夕かげ草に降る時雨かな」（草根集・夕時雨・二二一五・永享六年十月五日詠・四〇〇八にも重出）。●暮るる春雨　雨足のこまかい春雨が、夕暮れ時にはけむるようにあたりをいっそう暗くする。暮れるともなく暮れていく春雨の夕方の様。「長き日の暮るるしられでさらに猶かすみぞまさる春雨の空」（題林愚抄・夕春雨・七九七・頓阿）のように、春雨が降っていても、春の日は長く暮れがたいことが詠まれる場合もあるが、ここは春雨によってけむるようにいっそう暗くなった夕暮れ時の様子を詠んでいる。「すがのねの長き日影も春雨のふるをたよりに暮るる空かな」（草庵集・春上・夕春雨・七三）。

【付合】前句で花が散るのに、春雨をつけ加え、春雨のうちに日も暮れる、春まっただ中の一日の終わりの情景とした。前句の「花散りて」と付句の「残る」とのつながりが残花のイメージをただよわせるところ、一四句同様、専順の付け方の工夫か。なお、花に春雨を添えた専順の句に「風静なる花の夕映／春雨の名残ほのかに月出て」（竹林抄・春・五七・専順）がある。

【一句立】残っている日ざしも、春雨にけむる中、いつもより早く暮れていく。

【現代語訳】（前句　故郷では、見てくれる人もいないままに花が散って行き。）花が散った後に残る日の光も、雨に煙り薄暗くかげって、いつもより早く暮れていく、春雨の降る春の長い一日。

（二折　表　一）　残る日早く暮るる春雨

二三　霞みつつ帰るも知らぬ空の雲　　大況

【校異】況ー阮（野坂本）

【式目】霞みつつ（春）　霞（聳物・可隔三句物）　雲（聳物・可隔三句物）　空空だのめなど云ては此外也（一座四句物）

【作者】大況

【語釈】●霞みつつ　霞んでいるので。「霞みつつ夕入空を立わかれ春より先にかへる雲かな」（草根集・暮春雲・一〇三三八・長禄二年三月二十九日詠）。●帰るも知らぬ　帰って行ったのかもわからない。夕暮れ時には雲は山の峯に帰っていき、「夕ゐる雲」となるが、霞でその様子がわからない様。「鐘の声思いれとはさそはねど聞ゆる山に雲帰るなり」（草根集・暮山鐘・六二〇六・宝徳二年二月十日詠）。「かつらぎや高間のさくらながむれば夕ゐる雲に春雨ぞ降る」（金槐集・遠山桜・五二）。

【付合】降るか降らないかわからないほどかすかに煙る春雨の降るさまを「霞みつつ」と表現してつけた。「霞みつつ降るとも見えぬ夕暮の袖にしらるる春雨の露」（嘉元百首・春雨・五〇七・鷹司冬平）。一句では、春霞で霞んでいるさまである。

【一句立】霞んでいるので、山に帰って行く様子もわからない、空の雲のさま。

【現代語訳】（前句　残っている日ざしも、春雨にけむる中、いつもより早く暮れていく。）　春雨に霞み、夕暮れになる山に帰って行く様子もよくわからない、空の雲のさま。

【備考】霞、雲のような聳物同士は、互いに可隔三句物であるが、ここは「霞つつ」と「雲」が一句に同時に詠みこまれており、問題がある。

（二折　表　二）　霞みつつ帰るも知らぬ空の雲

二四　のどけき波に消ゆる雁金　　宗怡

【校異】怡ー沖（野坂本）

【式目】雁金（秋）　波（水辺・用）　雁春ー秋ー（一座二句物）

【作者】宗怡

【語釈】●のどけき波　のどかな波。「秋の空のどけき波に月さえて神風さむし伊勢の浜荻」（後鳥羽院御集・神祇・二七九・建仁元年三月内宮御百首）。●消ゆる雁金　消えて行く雁の姿。雁金は雲や空に消えると詠まれることが多い。「水ぐきの跡もとまらず見ゆるかな波と雲とに消ゆる雁金」（式子内親王集・春・二二〇）。

【付合】付合は「帰る」に「雁金」を付け、春の帰雁の様とした。前句との関係では春の句となるが、一句では秋。

【一句立】のどかな波の彼方に消えて行く鴈の姿。

【現代語訳】（前句　霞んでいるので、雁が帰って行く様子もわからない、空の雲のさま。）　春ののどかな海の波間には彼方に消えて行く帰鴈の姿がある。

（二折　表　三）　のどけき波に消ゆる雁金

二五　浦づたひゆくゆく舟の遠ざかり　　実中

【式目】雑　浦（水辺・体）　舟（水辺・用、新式今案においては、水辺体用之外）

【作者】実中

【語釈】●浦づたひ　舟で海岸に沿っていくこと。「目覚しなる、秋の夜な〳〵／舟もよふ暁月の浦伝ひ」（竹林抄・秋・四二六・心敬）。●ゆくゆく　どんどん。滞りなく。次第に。ここは「ゆく」が「（浦づたひ）行く」と掛詞になる。「漕ぎわかれ行く行く船の跡消えて／渡るも悲しあだし世の中」（新撰菟玖波集・雑五・三二七三／三二七四・後花

園院）。なお、「浦づたひゆく」「遠ざかり」を持つ和歌としては「さ夜千鳥浦づたひゆく波の上にかたぶく月も遠ざかりつつ」（続後撰集・冬・四九三・九条良平）がある。

【付合】水辺を二句続けている。波の彼方に消える雁の飛ぶ方角と、浦々を海岸づたいに行く舟の航路の対比となる。「浦ニハ、浪　舟」（宗祇袖下）。

【一句立】浦づたいにどんどん進んで行く舟が遠ざかっていって。

【現代語訳】（前句　のどかな波の彼方に消えて行く鴈の姿。）浦づたいに海岸線を進んでいく舟が次第に遠ざかっていって。

【考察】『源氏物語』明石巻で、須磨から明石に移った光源氏が紫上に書き送った和歌に「はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして」とあり、二五句には『源氏物語』の面影がある。また『光源氏一部連歌寄合』に「これも此まきにげんじすまよりあかしへうらづたひし給へばあかしのまきといふべし」とあり、「浦づたひ」は明らかに源氏詞である。

（二折　表　四）浦づたひゆくゆく舟の遠ざかり

二六　橋にまぢかき勢多の中道　　専順

【校異】はしのーはしに（野坂本）　野坂本により訂正。

【式目】雑　勢多（名所）　橋只一　御階一　梯一　名所一　浮橋一（一座五句物）

【作者】専順

【語釈】●勢多　近江国の歌枕。琵琶湖畔、勢田川の右岸にある。琵琶湖と勢田川の合流点近くには勢田の長橋がかかる。「もち月のこまひきわたす音すなりせたの中道はしもとどろに」（三十六人撰・一三四・平兼盛）。「めぐるや遠きせたの中道／橋板もぬれぬばかりの初時雨」（心敬僧都百句・冬・二二一八／二二一九）。●中道　真ん中の道。途中の

道。また、恋人同士の間の通路の意味もある。

【付合】海岸の浦の句から句境を転換し、琵琶湖の湖畔の浦々とした。

【一句立】勢田の長橋に間近い勢多の中道。

【現代語訳】（前句　浦づたいに次第に船は遠ざかっていって。）勢田の長橋に間近い勢田の中道。

【考察】長松本は漢字の表記で「中道」と記しているが、「なかみち」「ながみち」いずれも考えられる。「Nacamichi ナカミチ（中道）まん中の道」「Nagamichi ナガミチ（長道）長い道」（日葡辞書）。「中道」である場合、和歌では圧倒的に大和国の歌枕である「布留」（現在の奈良県天理市布留附近）と結んで詠まれることが多く、例えば心敬は、恋の意で「中道」を使う場合に、「を篠原かりなる夢の中道も絶てふるのゝ夜はの秋かぜ」（心敬集・寄夢恋・三五〇）と布留を詠み入れている。だが、「勢多」と「中道」を結んで詠む歌例もわずかながらある。それらの歌例は、望月の駒を主題とした兼盛の和歌が模倣され学ばれているのだが、「長道」「中道」いずれの表記例も持つ。ここは類例は少ないが、「勢多」の「中道」とし、二五句の須磨・明石のイメージから、明石上との仲が始まることを下に響かせたと見る。

（二折　表　五）　橋にまぢかき勢多の中道

二七　逢坂や関をこゆれば夜の明けて　　艘

【校異】艘ー説（野坂本）

【式目】（関）羇旅　逢坂（名所）　関（山類・体）

【作者】元艘

【語釈】●逢坂　山城国と近江国の国境。逢坂山に関所がおかれた。「逢ふ」と掛ける。「一、相坂の関とすれば山類也。相坂と計は山類を遁（のがる）。」（宗祇袖下）。

【付合】勢多の中道に、近江の国に入る逢坂の関を付け、勢田の長橋も近い中道を過ぎれば、逢坂の関に近づき、関

を越えれば夜も明けて都に近づくとした。二五句からのつながりでは、琵琶湖を舟で東から浦づたいに進んできて、勢田の橋を渡り、逢坂の関をこえるという道筋である。二六、二七句の背後に、二人の仲を示唆する「中道」から、「逢ふ」へという恋の語句のつながりをほのめかしている。「人目のみたえぬなげきの中道やこえん方なき逢坂の関」（雪玉集・寄関恋・七五五一）。「やはせをいづる舟のたび人／乗駒のせたの中道とをくして／日ぞ長きいつか逢ひみん旅の友」（行助句・一三一三／一三一四／一三一五）。（行助句の三句は、滋賀県草津市矢橋から舟で琵琶湖を勢田へ旅する句の流れとなっており、「逢う」から「逢坂」を思わせる付合となっている。）

【一句立】逢坂の関を越えると夜が明けてきて。

【現代語訳】（前句　勢田の長橋が間近い勢田の中道。）逢坂の関を越えると夜が明けてきて。

（二折　表　六）逢坂や関をこゆれば夜の明けて

二八　杉の葉白く落つる月影　　心敬

【式目】月影（秋）　影に陰（可嫌打越物）　杉（植物）

【作者】心敬

【語釈】●杉の葉白く　月の光に杉の葉が照り返される様。「送りこし月も都に帰るらん杉の葉くらき逢坂の山」（心敬集・関路惜月・一四〇）。●落つる月影　ふり落ちる月の光。また沈む月影。前句との関係から、「落つる」は低く沈むことも意味する。「明方に夜は成りにけり鳴滝や西の川瀬に落つる月かげ」（為尹千首・滝月・四二一）。「淡路島むかふ汐干にあらはれて／波こすばかり落つる月影」（熊野千句第七百韻・八五／八六・勝元／心敬）

【付合】前句の「逢坂」に「杉」を付けた。「鶯の鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉白き逢坂の山」（新古今集・春上・一八・後鳥羽院）。「杉トアラバ、相坂の関」（連珠合璧集）。前句からは、有明の月の光となる。

【一句立】杉の葉を白く光らせてふりそそぐ月の光が見える。

【現代語訳】（前句　ここ逢坂では、関を越えると、夜が明けてくる。）関のあたりは杉の葉が月光に白く光り、有明の月はもはや沈みかけている。

【考察】杉の葉が白くなるという描写は、後鳥羽院の歌（新古今集・一八）をはじめとして雪や霜、また珍しいところでは散る桜におおわれたさまとして詠まれている。「明わたる横川の雲のたな引て／杉の葉しろき花の山本」（行助句・九九七／九九八）。月の光に白く葉が照り映える様子と、月が沈み、月光が消えて、葉が闇に沈む様子も詠む（「送りこし月も都に帰るらん杉の葉くらきあふ坂の山」（心敬集・関路惜月・一四〇））心敬は、月光が杉の葉にうつろう様に強い関心を抱き、独自に白く照り返す様を詠みいだした。おそらく『徒然草』百三十七段の一節「望月のくまなきを千里のほかまで眺めたるよりも、暁近く成て待ち出でたるが、いと心ふかう、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴、白樫などの、濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらぬ友もがなと、宮こ恋しう覚ゆれ。」を意識していると思われる。心敬は横川、逢坂あたりの山の杉を詠むことが多い。比叡山での修行時代に、深遠な光景に感銘も受けていたものであろうか。

（二折　表　七）杉の葉白く落つる月影

二九　神垣や木綿に秋風冷じく　　専順

【式目】秋風・冷じく（秋）　神垣（神祇）　秋風只一秋の風一（一座二句物）　涼に冷（可嫌打越物）

【作者】専順

【語釈】●神垣　神社の周囲の垣。神社。●木綿　楮などの樹皮から繊維をとり、細かく裂いて糸にしたもの。白木綿。幣帛に使用する。●冷じく　冷え冷えとした様子。「すさまじは、大方秋のさむきをいへるなり。」（分葉集）。「いつのまにかは風かはるらん／結びてし水冷じく秋のきて」（文安月千句第一百韻・五四／五五・玄幸／直清）。

【付合】「白」に「木綿」を付け白木綿とした。「秋の心、すさまじ」（連珠合璧集）。

【一句立】神社の神域では、白木綿に吹く秋風が冷え冷えとして。

【現代語訳】（前句　杉の葉を白く光らせてふりそそぐ月の光が見える。）そんな神々しい神社の神域では、白木綿に吹く秋風が冷え冷えとして。

（二折　表　八）　神垣や木綿に秋風冷じく

三〇　色になびくや野辺の夕霧　　行助

【校異】はーや（野坂本）、ハ（延宗本）　野坂本により訂正。（前句に「神垣や」があるが、語句としては「色になびくや」が自然である。）

【式目】夕霧（秋）　夕霧（聳物・可隔三句物）

【作者】行助

【語釈】●色になびく　寒々とした暮色をなして流れている様。ここは前句の「秋風」の「冷じく」吹く様子が、霧の広がりをつくり、「色になびく」となる。「山もとの夕けの煙うすくこき色になびくや松の村立」（松下集・薄暮煙・一二四九）。●野辺の夕霧　「うちむれて麓にくだる山人のゆくさきくるる野べの夕霧」（永福門院百番自歌合・一八六）。「白露もあらぬ色にや置迷ふ／むら〳〵くもる野べの夕霧」（熊野千句第十百韻・六九／七〇・道賢／幸綱）。なお、二〇句に「野辺の松風」があり、「野辺」が重出する。

【付合】「木綿」に「なびく」を付けた。「しらゆふトアラバ、なびく」（連珠合璧集）。前句の秋風により、神域にかかる白木綿もなびき、野辺の白い霧もなびくとした。付句で時刻を夕暮れ時としたことで、白い霧もうす暗さを映し、暮色を見せている。

【一句立】暮色をなしてなびいている野辺の夕霧。

【現代語訳】（前句　神社の神域では、白木綿に吹く秋風が冷え冷えとして。）　木綿同様、秋風に寒々とした暮色を見せて白くなびいている野辺の夕霧の様子よ。

（二折　表　九）　色になびくや野辺の夕霧

三一　刈り残す小田の一むら里かけて　　宗祇

【校異】小田ー里（野坂本）里ー小田（野坂本）

【式目】刈り残す（秋）　田与田（可隔七句物）　里（居所・体）

【作者】宗祇

【語釈】●刈り残す　「刈り残す稲葉一むら霜置きて岡辺の道はさをしかの跡」（称名院集・鹿声稀・六一二）。●小田　小さな田。●一むら　ひとかたまり。ここでは一群の稲。●里かけて　里の方にかけて。「きりこむる秋の山べのつま社／さとかけて吹道のつじ風」（小鴨千句第九百韻・六七／六八・忍誓／之基）。

【付合】前句の野辺の近傍の情景を付けた。付合では、稲穂を刈り残してある部分だけ、霧に透けて色がついているさまとなる。

【一句立】里にかけて、刈り残した一群の稲が小田に残っている。

【現代語訳】（前句　残りの稲を透かしてなびいている野辺の霧。）野辺の方から里にかけては、刈り残した一群の稲が小田に残っているので。

（二折　表　一〇）　刈り残す小田の一むら里かけて

三二　湊を深み波ぞ荒れぬる　　幸綱

【式目】雑　湊（水辺・体）　波（水辺・用）　水辺の体と用を一句の内に用いており、不審。

【作者】幸綱

【語釈】●湊　河口。●湊田　川が海にそそぐあたりの田。河口付近の三角州、低湿地は水田に多く利用されてきた。「けふも又浦風あれて湊田につりせぬあまや早苗とるらん」（新拾遺集・夏・二四〇・平宣時）。

【付合】付合では、前句の里の情景を、河口近くの湊田の情景と見た。「田トアラバ、湊」（連珠合璧集）。「みるめやよそのもてなやみぐさ／湊田に植ゑをく早苗塩こして」（連歌五百句・五一四／五一五・専順）。

【一句立】河口のあたりの水が深くなって、波が荒れてしまっている。

【現代語訳】（前句　里の方にかけては、刈り残した一群の稲が小田に残っている河口近くの田。）河口のあたりの水位が上がり、天候が悪くなって波が荒れ、刈る事もできなかったままなのだ。

（二折　表　一一）湊を深み波ぞ荒れぬる

三三　五月雨を満つ汐なれや比良の海　心敬

【式目】五月雨（夏）汐（水辺・用（『連歌新式並新式今案等』））比良の海（名所）海（水辺・体）五月雨只一梅雨一（一座二句物）塩只一焼て一潮一（一座三句物）

【作者】心敬

【語釈】●満つ汐　水かさの増した潮。本来琵琶湖には干満はないが、「比良の海」と呼ぶところから、干満のないはずの琵琶湖が、五月雨によってまるで満潮になったよう、という諧謔性を含んだ言い方。「満つ汐の流れひるまもなかりけり浦の湊の五月雨の比」（続拾遺集・五月雨・一八三・藤原為家）。「洲崎をよそに鳥の群立／満汐にあらくなりぬる波の音」（熊野千句第四百韻・四／五・心敬／勝元）。●比良の海　比良は近江国の歌枕。今の滋賀県滋賀郡にある、比良山は比叡山の北に連なる山。「比良の海やみなとの春の荒小田に夕浪こえて雁ぞむれゐる」（草根集・湊帰雁・二九一二・巻四）。「波荒れにけり比良のうみぎは／風騒ぐみなとに船をひきすてて」（寛正三年正月二十五日何人百

韻・七四／七五）。

【付合】波の荒々しさは、比良山から吹きつける比良山おろしが吹きつける比良の海だから、湊が深くなっているのは、五月雨の増水のためと付けた。三二句を丁寧に説明し、その意図を明確にして救った、宗匠らしい句。

【一句立】潮の満ち干などない湖のはずなのに、梅雨の雨水をたたえたので、水かさを増しているのであろうか、比良の海は。

【現代語訳】（前句　河口のあたりの水が深くなって、こんなに波が荒れてしまっている。）梅雨の雨水をたたえたので、水かさを増しているのであろうか、比良の海は。

（二折　表　一二）　五月雨を満つ汐なれや比良の海

三四　柴干しわぶる海人の衣手　　行助

【式目】雑　海人（人倫・水辺・用）　衣与衣（可隔七句物）　人倫与人倫（可嫌打越物）

【作者】行助

【語釈】●柴干しわぶる　柴をかわかすのに難儀している。柴は、水辺に住む海人にとっても、藻塩を焼いたり、暖を取ったりするために大切なもの。「雲うつる谷は日影やなかるらん／柴干侘る山陰の宿」（初瀬千句第五百韻・七五／七六・宗砌／超心）。●海人の衣手　海人の着物の袖。「比良の海やさざ浪かけてあま人の袖ふきかへす秋の初風」（慕風愚吟集・湖初秋・二三一）。「さぞなさゆらしあまの衣手／寝ぬ人はむべ心ある月の夜に」（親當句集・三九九／四〇〇）。

【付合】五月雨の長雨に、琵琶湖で漁をする海人が柴木を乾かすのに難儀していると付けた。山の情景として詠む柴を湖畔に持ってきた付句。

【一句立】柴木を干しづらくて困っている海人の衣の袖よ。

【現代語訳】（前句　梅雨の雨水をたたえ、増水した潮としているのであろうか、比良の海は。）柴木を干しづらくて困っている海人の衣の袖よ。

（二折　表　一三）柴干しわぶる海人の衣手

三五　わが方や思ひの煙まさるらん　　専順

【式目】思ひ（恋）　煙（聳物・可隔三句物）　思に火可依句躰也（可嫌打越物）

【作者】専順

【語釈】●思ひの煙　あの人を思う気持ちの煙。「思ひ」に「火」を掛ける。「空に満つ思ひの煙雲ならばながむる人の目にぞ見えまし」（拾遺集・恋五・九七二・少将更衣）。「思トアラバ、煙」（連珠合璧集）。

【付合】前句の「柴」に「煙」を付け、恋の句に転じた。「柴トアラバ、ほす　煙」（連珠合璧集）。

【一句立】私があの人を思う気持ちは火のように燃えさかり、あの人が私を思ってくれる気持ちよりもずっとまさっていることよ。燃え上がった私の気持ちは煙となって目に見えているであろうよ。

【現代語訳】（前句　柴木を干しづらくて困っている海人の衣の袖よ。）自分の方には、生乾きの柴をくべたので、くすぶって煙が多くあがるようだ。それと同様、あの人を思う思いの火が燃えさかって、この気持ちはあふれて煙となってひどくあがるように思われることよ。

（二折　表　一四）わが方や思ひの煙まさるらん

三六　心ぞうはの空にまよへる　　鰯

【校異】鰯ー説

【式目】まよへる（恋）　空空だのめなど云ては此外也（一座四句物）

【作者】元
【語釈】●うはの空　心が落ち着かず、注意が拡散してしまうこと。「うはの空にをしへし杉の梢にも心は見えて秋風ぞ吹く」（心敬集・寄木恋・七九）。
【付合】「煙」に「空」を付けた。
【一句立】私の心は、ふらふらと上の空でまよっているようだ。
【現代語訳】（前句　私があの人を思う気持ちは火のように燃えさかり、あの人が私を思ってくれる気持ちよりもずっとまさっていることよ。燃え上がった私の気持ちは煙となって激しくのぼっている。）そして、その結果、私の心は、あてどもなくふらふらと上空でさまよっているようだ。

（二折　裏　一）　心ぞうはの空にまよへる

三七　花薫る夜半に覚えず起き出でて　心敬

【式目】花（春）　夜半（夜分）
【作者】心敬
【語釈】●花薫る　花が匂いやかに美しく咲く。和歌では、明け方のわずかな光の中に見えてくる花の美しさを詠む形をとる。「詠にはたぐひやはあらむ花薫る都の春の曙の空」（菊葉集・都春曙・一一五・後崇光院）。「方敷きかぬる夜半の衣手／花薫る苔の筵に雨落ちて」（竹林抄・一四六・宗砌）。●夜半　夜のうちで、夜中から暁にかけての深夜をいう。●覚えず　意識的でなく。思いもかけず。
【付合】前句の心ここにあらずといった様子を、花の艶なる夜更け方、惑い出てしまった境地とした。二折の裏の句となり、句境を一新する、宗匠としての心づかい。
【一句立】花の美しく咲く夜更けに、我知らず花を眺めに起き出して。

【現代語訳】（前句　私の心は、桜の美しさに気を奪われて、ふらふらとさまよっているようだ。）花が美しく咲く夜更けに、我知らず起き出してしまって。

【考察】二折の裏に入り、宗匠としてあらたに句の運びを進展させるために、艶なる春の夜の景を詠み出し、連衆による新しい句境の出句を期待している。

（二折　裏　二）花薫る夜半に覚えず起き出でて

三八　なにとか春の夢は見えけむ　　行助

【校異】とか（かは）ー延宗本

【式目】春の夢（春）　夢与夢（可隔七句物）　夢にうつゝ　寝覚に夢（可嫌打越物）

【作者】行助

【語釈】●なにとか　一体どうして。延宗本朱書に依る「なにかは」がより自然な語法ではある。●春の夢　春の夜に見る夢。はかなくとらえどころのないものである。「風かよふ寝ざめの袖の花の香に薫るまくらの春の夜の夢」（新古今集・春下・一一二・皇太后宮大夫俊成女）。なお、六一句には「秋の夢」がある。

【付合】「花」に「夢」を付け、おぼろな春の夜の思いを描いた。「夢トアラバ、はかなき　花」（連珠合璧集）。「花の香のかすめる月にあくがれて夢もさだかに見えぬ比かな」（続後拾遺集・春下・一三〇・藤原定家）。

【一句立】一体どうして春の夢は見えていたのであろう。

【現代語訳】（前句　花が美しく咲く夜更けに、我知らず起き出してしまって。）一体どうしておぼろな春の夢は見えたのであろう。

（二折　裏　三）　なにとか春の夢は見えけむ

三九　都人面影霞む別れ路に　　**専順**

【校異】宮は人ー都人（野坂・延宗本）。両本により訂正。

【式目】面影（恋）　別れ路（恋）　面かげにかげ（可嫌打越物）　都人（人倫）　人倫与人倫（可嫌打越物）

【作者】専順

【語釈】●都人　都の人。田舎人とは遠く離れた都会に住み、田舎の景物には親しみがなく、めったに田舎を訪ねてこないと形象される。「都人月はへだてぬ面影にならはぬものはさをしかの声」（和歌所影供歌合建仁元年八月・旅月聞鹿・七八・寂蓮）。「山桜咲かばといひし都人／いかにととはぬ日こそ永けれ」（熊野千句第五百韻・三五／三六・元説／専順）。●面影霞む　面影がかすんでわからなくなる。「面影のかすめる月ぞやどりける春や昔の袖の涙に」（新古今集・恋二・春恋・一一三六・皇太后大夫俊成女）。●別れ路　恋人と別れて行く道。また、その別れ。「契をも人はのこさぬ別路に面影ばかり何とまるらむ」（続草庵集・別恋・三六六）。

【付合】「夢」に「面影」を付けた。「面影トアラバ、夢」（連珠合璧集）。付句は、その面影を偲ぶしかなすすべのない、あてにならない都人の恋人を持ってしまった田舎の女性との想定の句。

【一句立】都の人の面影も、おぼろに霞み、もうわからなくなった別れ道。

【現代語訳】（前句　一体どうしてはかない春の夢は見ることができたのであろう。）　都の人の面影も、おぼろに霞み、もうわからなくなった別れでは、もはや夢も見えるはずはなくなって。

（二折　裏　四）　宮こ人面影霞む別れ路に

四〇　朝行く月のかかる遠山　　**宗祇**

【式目】月（秋）　遠山（山類・体）　朝月（一座一句物）

【作者】 宗祇

【語釈】 ●朝行く　朝に空を移動する。また、「朝行く」には、明方に出ていってしまう恋人との別れのイメージがある。「ぬばたまのこの夜な明けそあからひく朝行く君を待たば苦しも」（万葉・巻十一・二三八九、拾遺集・恋二・七一七（人まろ）にも「むばたまのこよひなあけそあけゆかばあさゆく君をまつくるしきに」として採録）。万葉詞としての用法に注目してよいか。さらに、前句の「面影かすむ」では、「月」に、恋人の面影を重ね合わせて恋人を思い、またその月が涙に濡れた袖にやどるという俊成卿女の歌が、思い起こされている。それを思えば、四〇句においても「月」は、恋人の面影を投影したものとなる。

なお、「朝行く月」と続けた言い方は、管見では連歌の用例が浜宮千句まで下る珍しい語句。「いづくにか野べの旅人やどるらん／あさゆく袖にふれるしら雪」（葉守千句第三百韻・二三／二四・肖柏／宗長）。

【付合】 「都」に「遠山」を付けた。「遠山トアラバ、都」（連珠合璧集）。「今朝見れば遠山しろしみやこまで風のおくらぬ夜はの初雪」（玉葉・冬・九五〇・宗尊親王）。

【一句立】 朝になっても空を行く月がかかってみえる遠くの山。

【現代語訳】 （前句　都の人の面影も、おぼろに霞み、もうわからなくなった別れ道。）朝になっても空を行く月が、遠山にかかっている。あの月のように、あの人は朝になったら私の家を出て行き、遠い山路をたどっているのだ。

（二折　裏　五）朝行く月のかかる遠山

四一　里あれや野にやすらはぬ鹿の声　　況

【校異】 あれやーなれや（野坂本）　況ー説

【式目】 鹿の声（秋）　鹿只一　鹿の子一　すがる一（一座三句物）　里（居所・体）　野与野（可隔五句物）

【作者】 大況

【語釈】●里あれや　里があるのだろうか。「里あれやゆふつけ鳥のさかこえて鳴く音聞こゆる夜半の山風」（草根集・遠村鶏・六九〇九・宝徳三年五月十九日詠）。●鹿の声　朝方に山に帰る途中の鹿の声。鹿は夜に里におりて来て動きまわり、朝になるとまた戻っていく用心深い動物である。

【付合】「朝行く」に「鹿」を付けた。「秋の野を朝行く鹿の跡もなく思ひし君に逢へる今夜か」（万葉集・巻八・一六一三・賀茂女王）。

【一句立】里があるのだろうか。野に止まって休もうとしない鹿の声がする。

【現代語訳】（前句　朝になっても空を行く月がかかってみえる遠くの山。）里があるのだろうか。山に戻る途中、野に止まって休もうとしない鹿の声がする。

（二折　裏　六）　里あれや野にやすらはぬ鹿の声

四二　過ぎぬる秋ややどりだになき　中

【式目】秋　やどり（「宿只一、旅一、やどり此外にあり。鳥のやどり・露のやどりなどの間に又有べし。」（一座二句物（『連歌新式並新式今案等』））

【作者】実中

【語釈】●すぎぬる秋　過ぎてしまった秋。「秋」と「飽き」を掛ける。「契りけん程や過ぎぬる秋の野に人松虫の声のたえせぬ」（拾遺集・秋・一八一・よみ人しらず）。●やどり　一時的にとどまる場所。（参考　脇句に「やどり」あり。）

【付合】前句の「鹿の声」に「過ぎぬる」を続ける。過ぎた秋には、恋のイメージがまつわり、次の四三句での恋句への転換の鍵となっている。

【一句立】過ぎてしまった秋は、とどまる場所さえもないのか。

【現代語訳】（前句　里があるからであろうか。野に止まって休もうとしない鹿の声がしている。）その通り過ぎて行く鹿の声同様、時移り、過ぎて行く秋にも、とどまる場所さえないのか。

（二折　裏　七）　過ぎぬる秋ややどりだになき

四三　袖くたす露も昔をしのぶ身に　　**宗怡**

【校異】昔も｜昔も（延宗本）・昔を（野坂本）　両本により訂正。

【式目】露（秋）　露（降物・可隔三句物）　昔（一座一句物）　身（人倫）　人倫与人倫（可嫌打越物）

【作者】宗怡

【語釈】●袖くたす　袖を朽ちはてさせてしまう。「一人寝をいく夜かさねてさ筵にかたしく涙袖くたすらむ」（延文百首・寄筵恋・一一八五・洞院公賢）。●昔をしのぶ　過去をなつかしく思う。「思ひやれむなしき床をうちはらひ昔をしのぶ袖のしづくを」（千載集・哀傷・五七四・藤原基俊）。

【付合】秋に「やどり」がないとする前句に、涙の「露」も昔をしのんでつらい思いをしている我が身にはたやすくやどるのにと、対比を意図し付けた。

【一句立】袖をぬらし朽ち果てさせるほどの涙の露も、昔を恋しく思うこの身に宿る。

【現代語訳】（前句　過ぎていってしまった秋は、とどまる仮の宿さえもなくて。）　袖をぬらして朽ち果てさせてしまう涙の露も、昔を恋しく思うこの身に宿るのに。

（二折　裏　八）　袖くたす露も昔をしのぶ身に

四四　花橘の落る雨の日　　**艘**

【校異】艘｜説（野坂本）

【式目】花橘（夏）　雨（降物・可隔三句物）　橘（一座一句物）

【作者】元躰

【語釈】●花橘　花の咲いている橘。香りが賞される。「五月雨に花橘の露けさは昔の人の涙なりけり」（洞院摂政家百首・四九六・但馬）。「軒ちかき花橘に雨すぎて露も昔の香ににほひけり」（嘉元百首・廬橘・一〇二三・藤原公顕）。「ほととぎすつれなきうちに又やねん／花橘のうつろへる暮」（河越千句第五百韻・二一／二二・心敬／印孝）。

【付合】「昔」「袖」から「花橘」を呼びこんだ。伊勢物語第六十段の世界を背景にする句であるが、「橘の花散る軒のしのぶ草昔をかけて露ぞこぼるる」（新古今集・夏・二四一・近衛忠良）が表現としては近い。「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（古今集・夏・一三九・よみ人しらず、伊勢物語六〇段）。「橘トアラバ、昔　五月雨」（連珠合璧集）。

【一句立】昔を思い出させる橘の花が落ちる雨の日。

【現代語訳】（前句　袖をぬらし朽ち果てさせる涙の露も落ちて、昔を恋しく思うこの身に置き）　昔を思い出させる橘の花も落ちる、雨降る日。

（二折　裏　九）　花橘の落る雨の日

四五　松高き影ふむ道に風吹きて　　宗祇

【校異】高き―高み（野坂本）・高き（延宗本）

【式目】雑　松（植物・可隔七句物）　風（吹物）　道与道（可隔五句物）

【作者】宗祇

【語釈】●松高き　松が木高く生え。長い年月の経過を示し、十五世紀後半以降、連歌にならい和歌にはわずかに入るようであるが、ほとんど例がない。「松高き雪の白木綿かすむなり神の御山に春やたつらん」（草根集・立春・

七二四七・宝徳三年十二月七日詠）。「せきいれて年ふかからし池水の岩にこけおひ松高きかげ」（雪玉集・池水久澄・二二三一）。「老木さへ花の盛りにあるものを／藤咲きのぼり松高きかげ」（寛正四年三月宗祇独吟何船百韻・九五／九六）。●影ふむ道　影を踏んで歩く道。万葉詞ではあるが、用例は少ない。「橘の影踏む道の八衢に物をぞ思ふ妹に逢はずして」（万葉集・巻二・一二五・三方沙弥、玉葉集・恋一・一三二七にも入る）。「御はしのもとの人の沓音／袖にほふ花橘の影ふみて」（宗砌発句並付句抜書・二〇六七／二〇六八）。「橘トアラバ、かげふむ道」（連珠合璧集）。

【付合】「橘」に「影ふむ道」、「雨」に「松風」をつけた。「雨降ると吹く松風は聞こゆれど池のみぎははまさらざりけり」（拾遺集・雑上・四五四・紀貫之）。「雨トアラバ、松風」（連珠合璧集）。一句では松の影を踏む。付句で高い松を出すのは、長寿の松が木高くなるほどの長い期間が既に過ぎてしまったことを示す。

【一句立】松の高い影を踏んでゆく松陰の道に風が吹いて。

【現代語訳】（前句　昔を思い出させる橘の花が落ちる雨の日のよう。）長年の間には、松が木高く育ち、その影を踏んで物思いにふけって歩む松陰の道には、橘の香を運ぶ風が吹き、松籟の音は雨のように耳に届いて。

【考察】前句は、かつての恋人との間を思い返す句であり、そこには自分の人生の中での遠い昔をふりかえるという時の流れがある。これに対し、付句には、松が木高くなるまでの、より長い時間の流れがあり、悠久の流れの中に、ほんの一瞬、松の陰の道を歩む人生が重なることとなる。「風吹きて」と置かれた句が、その長い時の流れの中を歩む人の持つ時間の短さをきわだたせる。付句は、万葉に語句を借り、いわば伊勢物語の世界がイメージさせる懐旧の時間を、悠久の時の中に包み込む、柄の大きな句であった。

『所々返答』第三状には、四四・四五句の付合に関して、心敬が宗祇にあてた指導が書かれている。それによれば、

花たちばなのおつる雨の日
松たかき陰ふむみちは風吹きて

とあそばしつる、橘にかげふむ、雨に松風を寄せ給し、とがなく侍ども、此前句ひとへに余情こぼれ落たる物にて候

歟。大かた、

橘　郭公　鹿　鴈　鐘　擣衣　老　花　桜

などのたぐひ、付合とやらんなどにては、うるはしくは寄るべからず哉。

と述べられ、「橘」に「影ふむ」、「雨」に「松風」を寄せたのは無難であるが、この前句はひたすら詩情あふれる句であり、「橘」は余情をたたえた語句であるから、寄合などでは見事には付けられないと非難している。心敬自身も翌寛正七年二月四日何人百韻で、「露もはらはじ苔の小筵（行助）」に「松高き陰の砌りは秋を経て」と付け、松が高く育つに至るまでの長い年月を意識して「松高き陰」を詠んでおり、この語句により年月の長さを表現しているが、万葉歌の橘から寄合によって恋の気持ちをつなぎつつあらたに松陰の道とした宗祇の発想は、受け入れられていないようである。

句の流れからすれば、四三・四四句の付合で既になつかしく艶な伊勢物語の境地が詠まれており、打越から離れる原則ゆえ、宗祇の句作は特に責められるべきものではない。『所々返答』第三状は後年の指導（文明二年（一四七〇）五月に宗祇に送られている）であるので、心敬は、宗祇の付合のあり方にのみ着目し、橘の句に対する付け方の理想を教えたのであろう。

（二折　裏　一〇）松高き影ふむ道に風吹きて

四六　雲に分け入る峯の古寺　　専順

【式目】雑　峯（山類・体）　雲（聳物・可隔三句物）

【作者】専順

【語釈】●雲に分け入る　雲に入っていくかのように上っていく。「宮こ人とはぬもいかがうらむべき雲にわけいるやどのかよひ路」（正治初度百首・山家・一二八九・藤原隆信）。●峯の古寺　峯にある古寺。「見るままに鐘の音とほく

なりにけり雲もかさなる峰の古寺」（新続古今集・雑下・二〇一三・飛鳥井雅世）。「更る夜に月待かぬる谷の庵／住まばや秋の峰の古寺」（河越千句第八百韻・八三／八四・道真／宗祇）。

【付合】前句の「高き」から「峯」を呼びこんだ。松の嵐が吹く山の峰に寺が位置する。「松しほる嵐にしづむ入相の声より高き峰の古寺」（草根集・古寺・一六〇三・永享二年十月十四日条）。

【一句立】まるで雲に分け入っていくかのようにのぼっていく峰の古寺。

【現代語訳】（前句　松が高く生え、その影を踏んで歩んでいく道には、風が吹いていて。）
歩んでいく先には、まるで雲に分け入っていくかのように高く登る峰にある古寺。

（二折　裏　一一）　雲に分け入る峯の古寺

四七　鳥の音も稀に聞こゆる山の奥　　幸綱

【式目】雑　山（山類・体）　鳥只一春一水鳥、村鳥等之間一、鳥獣と云て又一、狩場鳥、浮寝鳥、夜鳥等は各別物也（一座四句物（新式今案））

【作者】幸綱

【語釈】●鳥の音　鳥の声。山奥では鳥の音もしないので、静けさ、奥深さの指標となる。「鳥の音も聞こえぬ山にいかでかは雲路をわけて人のかよはむ」（仲文集・一一）。●稀に聞こゆる　ひどく稀に聞こえてくる。「山にすらまれに聞こゆる鳥なれど里にもきみがあきよりも聞く」（躬恒集・一八二）。●山の奥　山奥。「思ひいるる心にみちをまかすれば鳥の音聞かぬ山の奥まで」（正治初度百首・羈旅・九八八・季経）。

【付合】前句の「雲に分け入る」に「鳥」を付けた。「鳥トアラバ、雲にいる」（連珠合璧集）。山奥は、鳥の声もまれな場所であることをいう。「鳥の音はまれなる山の奥にだになをところせく鹿や鳴くらん」（慕風愚吟集・深山鹿・二二四）。

【一句立】ここは、さわがしく聞こえるはずの鳥の声もひどく稀にしか聞こえないような山の奥。

【現代語訳】（前句　まるで雲に分け入っていくかのような高い峰をのぼったところにある古寺。）騒がしいはずの鳥の声もひどく稀にしか聞こえないような山の奥なのだ。

（二折　裏　一二）鳥の音も稀に聞こゆる山の奥

四八　竹のみ折るる雪の静けさ　　心敬

【式目】雪（冬）　竹に草木（可嫌打越物）　雪三用之、此外春雪一似物の雪別段の事也（一座四句物）

【作者】心敬

【語釈】●竹のみ折るる　竹が雪折れする音だけがしている。「竹を打つ音にはあらで雪折にねぶりをさます床の上かな」（松下集・閑中雪・二八五六）。「竹にことふる声や雪折／寒き日は園のね鳥の驚きて」（行助句集・六九七／六九八　なお六九七日文研ＤＢ「こたふる」）。

●雪の静けさ　「滝かすかなる雪のしづけさ／水きよき太山の月や深ぬらん」（葉守千句第四百韻・三六／三七・宗悦／宗祇）。

【付合】山奥の静けさは、雪に鳥が姿を隠してしまったゆえとした。「鳥の声松の嵐の音もせず山しづかなる雪の夕ぐれ」（風雅集・山雪・八二六・永福門院）。

【一句立】竹が雪折れする音だけしか聞こえないこの雪の日の静けさよ。

【現代語訳】（前句　ここは、鳥の声もひどく稀にしか聞こえない山の奥。）雪に埋もれ、竹が雪折れする音だけしか聞こえない静けさよ。

【考察】山の鳥たちは、ふだんは人の住む庵のあたりには集まってこないが、雪にふりこめられた朝には、居場所の木々を隠されて、庵に集まってくる。「雪降れば軒端をたのむ朝鳥の声ばかりする宿のさびしさ」（草根集・閑中雪・

七七五・永享十二年十一月廿七日）。心敬は、そんな鳥の習性を観察し、雪に埋もれた山里の静けさ、寂しさを表現しようとする時に、鳥の声を効果的に使っている。「思ひ絶え待たじとすれば鳥だにも声せぬ雪の夕暮れの山」（心敬集・閑中雪・六九）。閑居の雪のさまを詠む一つの形である。なお、雪の日の深山の鳥たちの様子や、竹の雪折れの様子のモチーフは、京極派和歌の系譜につながる。

（二折　裏　一三）竹のみ折るる雪の静けさ

四九　しげかりし園の下草冬枯れて　　行助

【校異】下葉は｜下草（野坂本）・下葉ハ（延宗本）　野坂本により訂正

【式目】冬がれ（冬）

【作者】行助

【語釈】●園の下草　庭園の樹木の陰に生えている草。「下草」は大荒木の森、老蘇の森等杜と共に使われることの多い用語である。連歌における「園の下草」の用例は管見では天文年間にまで下る。●冬がれて　冬になって葉が枯れて。「松陰の古葉も青き色なるに／小篠ぞ残る山の冬枯れ」（看聞日記紙背応永三十一年十月二十六日片何百韻・四七／四八・重有／□）。

【付合】前句の「竹」に「園」を付けた。「園トアラバ、竹」（連珠合璧集）。

【一句立】茂っていた庭園の樹の陰の草は冬枯れてしまって。

【現代語訳】（前句　雪に埋もれ、竹が雪折れする音だけしか聞こえない静けさよ。）茂っていた庭園の木の陰の草は冬枯れてしまって。

【他出文献】行助句集に「竹のみおるゝ雪のしづけさ／しげかりしそのゝ下草冬枯て」（一七六五／一七六六）の形で入る。

（二折　表　一四）しげかりし園の下草冬枯れて

五〇　みかゆるばかり里は荒れけり　　**実中**

【式目】雑　里（居所・体）

【作者】実中

【語釈】●みかゆる　見方を変えて見る。みちがえる。「みかへる」はハ行下二段活用であるが、室町時代からヤ行にも活用したという（日本国語大辞典）。「見変ふ」（ハ行下二段活用）と同等と見て、「見違えるくらいに荒れている」と解しておく。

【付合】冬枯れの園の様を「里は荒れけり」と表現している。『源氏物語』蓬生の面影があるか。

【一句立】みちがえるほどに里は荒れてしまったことよ。

【現代語訳】（前句茂っていた庭園の木の陰の草は冬枯れてしまって。）みちがえるほどに里は荒れてしまったことよ。

寛正六年正月十六日何人百韻調査記録及び翻刻

【日時】平成二十二年九月二十七日（月）

【場所】大阪天満宮（大阪市北区天神橋二丁目一番八号）

【調査者】伊藤伸江（研究代表者）奥田勲（研究分担者）

【書誌及び内容】

●長松本（天満宮文庫れ―五―一八）

冊子本一冊。縦一六．〇cm、横二一．五cm、袋綴（三ツ目綴）。橘と流れ紋を摺り出した茶表紙。左上に打ち付け書で「連歌十六巻」、その下に朱で「拾九番」と墨書されており、小口には「十九」と墨書の小口書がある。見返しに当該冊子掲載の連歌百韻の目録がある。十六の百韻の発句とその作者が記されており、当該百韻は三番目。一丁表右下に滋岡

文庫の朱印。右上に狂歌印「末の世にもしこれを見てよめぬとて思案する人あらは嬉しも」。墨付六十四丁。薄手の楮紙に本文のみが記されている。裏見返しに、草名風の書き方で奥書「文化十一年五月草　長松」を記す。当該百韻は百韻の句及び句上が冊子の九丁～十二丁に存する。破損等がなく、状態がよいが、冊子の後ろから四つの百韻には虫損が入ってしまっている。なお、この冊子には、十六番目に心敬発句「ころやとき花にあつまのたねもかな」の百韻（寛正七年二月四日何人百韻）も入る。

●延宗本（天満宮文庫れ－甲－七）

冊子本一冊。縦一六．一cm、横二四．二cm、袋綴（四ツ目綴）。縹色表紙。表紙左に打ち付け書にて「連歌千二百句／宗長　政宣　宗祇　宗碩／基佐　肖柏　雪　心敬」と大書。この人名は、目録に示された十二の百韻の発句作者の名である。左上に「七番」とある。中央上部左よりに大阪天満宮文庫旧ラベル「別九六」「貳四壹五號」「全部壹八八冊」が、右下に天満宮文庫新ラベル「甲七一」が貼られ、旧ラベルの下に「一」のスタンプが押されている。見返しには目録が墨書され、右下には岡延宗の朱印がある。目録には十二の百韻の発句とその作者が列挙されている。墨付五十一丁。楮紙。当該百韻は、十二の百韻のうち、後ろから二番目であり、四十三丁表から四十六丁裏に記されている。ただ、百韻の句のみで句上がない。

五十一丁目には、「文化十年酉八月　南曲（花押）」と本冊子の記載年月日がある。

なお、この冊子には十一番目、十二番目に心敬発句の百韻が入り、十二番目の心敬発句は「比やとき花にあつまの種もかな」、長松本と同じく寛正七年二月四日何人百韻である。延宗本は、『心敬作品集』（昭和五三・角川書店）に翻刻、解題がある。

両本は、ほぼ同時期に別の筆者により書写され、天満宮におさめられたものであるが、延宗本は句上がない。長松本には句上があり、百韻としての体裁を整えている。また、延宗本は同筆で朱による校合があり、その数も多い。長松本

は、親本にすでにあったと思われる訂正を黒で書き加えるのみであり、校合はなされていない。

なお、『連歌総目録』では、両本共に成立年次不明の作品として、発句を見出しとして掲出されている。成立年次が明らかであるので、年次で配列すべきところであり、『連歌総目録』での検索には注意を要する。

【長松本翻刻】（私に番号を付した）

何人

一　梅送る風は匂ひのあるし哉　心敬
二　やとりなれくる鶯のこゑ　実中
三　春の野を朝な〳〵に分出て　行助
四　ふむあとしるき雪のむらきえ（眼の宋）　元脈
五　谷の戸の霞もとちぬ月の夜に　専順
六　明行かたをかよふ山人　幸綱
七　木のもとにかくるゝ道は幽にて　大況
八　こけむす橋におほふ松かえ　宗祇
九　岸高く涼しき水の深みとり　宗怡
一〇　夕の風に舟そよりくる　公範
一一　うす霧のゝほれは旅の袖見えて　敬
一二　ゆく人つゝく秋の山陰　助
一三　もる声の鳥羽田にしけきよはの月　中
一四　落るかうへの鴈の一つら　順

一五　空にふる露は泪の色ならて　鰤
一六　ものおもふ身のたくひしらはや　綱
一七　とはれねは誰に恨をかたらまし　怡
一八　しのふにも名はもるゝ世の中　況
一九　すまはたゝ心のおくの山もかな　祇
二〇　草の戸あらす野への松風　敬
二一　故郷はみる人なしと花ちりて　助
二二　残る日はやくくるゝ春雨　順
二三　霞つゝ帰るもしらぬ空のくも　況
二四　のとけきなみにきゆる雁金　怡
二五　浦つたひゆく〳〵舟の遠さかり　中
二六　はしのまちかき勢田の中道　順
二七　あふ坂や関をこゆれは夜の明けて　鰤
二八　杉の葉しろく落る月影　敬
二九　神かきやゆふに秋風冷しく　順
三〇　いろになひくは野辺の夕きり　助
三一　かり残す小田の一むら里かけて　祇
三二　みなとを深み浪そあれぬる　綱
三三　五月雨をみつ汐なれや比良の海　敬
三四　柴ほしわふるあまの衣手　助

三五　わか方やおもひの煙まさるらん　順
三六　こゝろそうはの空にまよへる　鰤
三七　花かほる夜半に覚えす起出て　敬
三八　なにとか春の夢は見えけむ　助
三九　宮は人おもかけ霞むわかれ路に（本ノママ）　順
四〇　朝行月のかゝる遠山　祇
四一　里あれや野にやすらはぬ鹿の声　況
四二　すきぬる秋ややとりたになき　中
四三　袖くたす露も昔もしのふ身に　鰤
四四　はなたち花の落る雨の日　鰤
四五　松高き陰ふむ道に風ふきて　祇
四六　雲に分入峯のふるてら　順
四七　鳥のねも稀にきこゆる山のおく　綱
四八　竹のみおるゝ雪のしつけさ　敬
四九　しけかりし園の下葉は冬かれて　助
五〇　みかゆるはかり里は荒けり　中
五一　すてはつる身はもとのみの数ならて　鰤
五二　とはれむことや今はたのまし　順
五三　つゝみ来し契はよそにあらはれて　綱
五四　おもひの中にほとはへにけり　助

五五　風ませに長雨ふる江の泊舟　祇
五六　みきはの松は浪にうかへる　況
五七　住よしやのこる西日は杳にて　敬
五八　こなたとさすや頼む彼岸　順
五九　終に身をやとしはつへき浮世界（カハ歟）　助
六〇　わかおひすゑや草のうは露　敬
六一　はかなしや風まつほとの秋の夢　順
六二　いとゝよ寒のおもひねそなき　祇
六三　袖をなを月はとへとも人はこて　中
六四　すたれやつるゝ古宮のうち　敬
六五　つはくらめ出入軒の隙しけく　助
六六　みえつかくれつ霞む山もと　艫
六七　舟遠き春の朝川日のさして　祇
六八　柳にたかく風なひく色　怡
六九　木間より一葉の落る秋寒み　中
七〇　また露のこる冬（本ノマヽ）の夕かけ　敬
七一　きり〳〵す垣根をたのむ声はして　順
七二　長夜さむみわか床のうへ　順
七三　月そうき人は誰とかおしむらん　敬
七四　わかれもよそのよこ雲の空　助

七五　はる〳〵としらぬさかひに旅立て　祇
七六　けふはいつくにやとりからまし　綱
七七　花さけは木陰をあまたたとりきぬ　順
七八　いさ桜とて枝をたをらん　況
七九　春もたゝ君かためにやおしからん　敬
八〇　暮まつほとのなかき日もうし　鰤
八一　いのちにはあしたの露をたのまめや　祇
八二　をさゝかもとのよはのむしの音　怡
八三　ねられしな月に風ふくかり枕　助
八四　おもひやなるもあきの故郷（キ歟）　順
八五　衣うつ音はきけとも主しらて　況
八六　袖のうらはによする夕なみ（浦）　敬
八七　いつのたか涙よ海と成ぬらん　鰤
八八　ふるきおもひのはてやあらまし　綱
八九　冬枯のむくらの宿のたのみにて　敬
九〇　こゝろの月になにかさはれる　順
九一　いりてこそ広きをもしれ法の道　中
九二　をしへの門をさしてたつねむ　助
九三　うかれ行妹かあたりのくるゝ夜に　順
九四　森をみつ野のからすとふ声　怡

九五　ほと遠きすさきに鷺のあさりして　綱
九六　あき更わたり川風そ吹　祇
九七　あくるとも月ななかれそ浪の上　況
九八　尾花にかゝる露も散りけり　中
九九　朝露のまかきの葛葉いろつきて　敬
一〇〇　庭のまさこは幾重なるらん　助

心敬十六　大況　八
実中　十　宗祇十二
行助十三　宗怡　七
元鰒　九　公範　一
専順十六
幸綱　八